す　六方「ハヽ、ァ戒名を、戒名は又一雨日のうちに認めて持たして寄越します　●「ヘェ一雨日、何うか只今六方「ハヽ、ァ今かすでやッた時に、一緒にその序でに金戒名は又今後誰方か死んけませう　●「そんな冗談な事を仰しやッては困ります、只今願ひます　八方「オイ六方、戒名書かんかいナ　六方「こりや驚いたなァ　●「何うか一ッ戒名をば　六方「ァヽ、痛、痛タヽヽ、ァヽ痛……　●「オヤ和尚さん、如何なすッたので　六方「ァヽ、痛ァー私の持病の腹痛が發りましたので　●「それはどうも和尚さんお氣の毒さんで、コレ〳〵其處に萬金丹があッたらう、その萬金丹と、お湯を此方へ持ッてお出で、腹が痛みさすならこの萬金丹をお上り遊ばして　六方「これは有難う、厚ならございます　●「何うでございます、未だお腹のお痛みは治りませんか　六方「イヤ〳〵お庇蔭さまで腹痛はスッカリと治りました　●「

治りましたら戒名を何うか　六方「こりやァ難いたなァ……イヤ宜しい、ァヽ、それではこれが戒名でござるとや　●「ヘェー、これが戒名で、こりやァ貴僧萬金丹の紙袋ですがナ、これが如何いふものでございます　六方「然うとや、萬屋の金兵衛さんは疫で死なれた、それで萬金丹萬金丹　●「稀代な戒名です　●「イヤ戒名はそれに致しまして、伊勢朝熊と致してございますナ　六方「それは金兵衛さんは威勢のよかッたお方でありたが、死なれたので淺ましうなッた欲ッて、そこで伊勢朝熊　●「ヘェー、するとこの側に白湯にて用ゐべしと書いてあるのは、こりや如何いふ譯でございます　六方「それか、それはなる茶湯に及ばぬと云ふことぢや」。

第八回

二人は貰ッた禮物を懷紙に入れて、一旦山寺へ歸りましたが

支度を致しまして、この山寺をば、和尚の不在中を幸ひに、密と抜出しました、これから南都を見物して歩らうぢやアないかと出て参りましたが、聽て奈良の町へ這入りまして、猿澤の池の邊りへかゝりました 紛郎似多、これが采女の宮ぢやア似多「この宮さん何で彼方向いて居るのぢやア、往昔彼處に有る彼の柳は、彼れは衣掛柳と言ッて、采女の局が彼の柳へ着物をかけて、この池へ身を投げて死んだんや、その時にお宮が憐れに思うて、コロッと彼方を向いたといふとだ、それでこれを今に采女の宮といふ、この松は猿猴の松といふ、サア出で……これは十三鐘と云うて、往昔お稚子さんが手習をして居た時に、鹿が出て來て草紙を咥へた、すると稚子は怒り石を取ッてその鹿に打着けたさうだ、ところが鹿はそれが為めに即死をした、この奈良の捉は、鹿一匹殺せば石子詰の罰に行ふと云ふ事がある、可憐さうにその稚子は此處へさして石子詰になッたさうで 似多「ムヽン、如何いふものでこれを十三鐘といふ 紛郎「朝に六ッと暮の六ッの間にたッた一ッ鐘を撞く、それでこれを十三鐘といふ、サア此方へお出で……この邊りは總て淺茅ヶ原といふ、此處に淺茅燒といふ燒物の名物がある、これから春日さんへ御參詣に伴れて行く 似多「何ちも仰山の燈籠ぢやなア 紛郎「サア燈籠の數と鹿の數ばかりは讀盡した者はないといふ位ゐだ、ソレ、これが彈の燈籠だ、サアお出で……これは走元の大黑、これは春日の若宮ぢや」これを此方へ取ッて参りますとこれから三笠山 似多「此處には何ぞ名物があるかね 紛郎「此處の名物は火打燒、三條小鍛冶宗近が打ッた小狐丸の名劍、此處の刀を買ひに這入ると見せて呉れる、それから向ふへ取ッて行くと洞の紅葉、月日の岩、水

室の舊蹟がある、この山を向ふに越ゆると、鷲の巣、蝙蝠の岩屋、七本杉などがあるが、其處へ廻ると大分に大變ちや依ッて、最う今日はやめて置かう　似多「アゝこれが三笠の山といふのか　紛郎「然うぢや、阿部仲麻呂が唐土へ暦を取りに行ッて高樓で詠んだ歌がある　似多「何といふ歌ぢやエ　紛郎「名高いものだ、天の原ふりさけ見れば春日なる、三笠の山に出でし月かも　似多「ハゝア、此處等にチョイ〳〵と茶店があるナ　紛郎「ふゝこりやア手向山の八幡樣、この度は幣も取敢ず手向山、紅葉のにしき神のまに〳〵、という菅公の詠まれた御歌がある、これは四月堂、これは三月堂、これは二月堂の觀音さんぢや　似多「アゝ立派なものぢやナ、此處に在るのはこりやア何ぢや　紛郎「それはその空井戸ぢやが、二月になると、その井戸に水が湧くといふ、若狭からこれへ水が通ふ若狭の呼水と云う

て　似多「ハゝア、奈良の水取といふのはこれか　紛郎「然うぢや　似多「してこの杉は大きな杉ぢやナ、この杉には何か謂れがあるかエ　紛郎「こりやア良辨杉と云ふて、往昔小兒が慈に愛はれて、この杉の樹へ落された、その子そば出家にして育てたがこれが良辨僧正と云ッて、東大寺の開山になッたのぢや　似多「ハゝア、ゑらいものやなア　紛郎「サアお出で……これは大佛の鐘ぢや　似多「ふゝゥ成程大佛に多きい鐘ぢやナ　紛郎「惡い酒落やなア、ソレ、これは大佛のあらび餅といふ名物ぢや、これが大佛殿　似多「途方もない大きなものぢやなア　紛郎「下から斯う見て居ると小さいやうぢやけれども、花瓶にさしてある蓮の葉が直徑一間ある　似多「ヘエー、チョイと見ると小さう見ゆるがなか〳〵大きなものぢやなア　紛郎「ソレ、この竹で寸を當るやうにチャンとしてある、往昔この大佛樣のお目が落ちたとが

あるさうだ　似多「ハヽア、すると大佛様は眇目になッたのか

紛郎「その時にその目を元の通りに嵌めにやアならぬといふので、廣く入札をした事がある、さうしたら皆な出て來て、マア五百兩呉れとか千兩呉れとか八百兩呉れとかと、何しろこれを雇めやうと言うには、仰山な人數が要るから、大勢の人でなければその目を雇める事は出來ぬ、さうすると此處へ父子二人が出て來て、その五百兩なり八百兩なりは寄附をしませうといふ、一文も要らない、私等が直に目を雇めて進げませうと申込んだ、如何な事をするだらう、彼れ此れ千兩もからうといふ仕事をば、見れば身薄い服裝をした奴が、寄附の出來るといふやうな男でもないが、如何爲をするだらうと見て居ると、腰に大きな鑿鎚をば一本挿して、大きな釘をば口に咥へて、父子二人は足場もなく這上ッて、目の中へ這入ッて仕舞ッた、暫くすると二人は目をば搗いで、チヤンと其處へ雇めて、前の穴の所へさしてカン〳〵と打ッて仕舞ッた、すると皆な大勢それを見て居た者は、彼奴這入ることは這入ッたが出るのは何處から出をるだらうと見てゐると、中々怜悧な奴で、煙草を二三服喫む間に、這入ッた父子の二人は、鼻の穴から這うて出た、ナア、それで今に言うたものぢや、怜悧な人は目から鼻に抜けると　似多「ハヽア、そりや具實かエ

紛郎「嘘や　似多「冗談言ふなエ　紛郎「この大佛の裏手に正若院と云ッて、南都の結搆な寶物は皆この寺にあるのぢや　似多「そいつを一ッ見たいなア　紛郎「なか〳〵そりやア傳手があッても、容易に見る事は出來ぬ、サアお出で……これが圓滿院といふのぢや、この屋根の正面の破風の所に在る瓦は、ニコ〳〵瓦と云ッて、見て居るとニコ〳〵笑うてゐるやうぢや、これは奈

良の都の八重櫻といふのぢや、經音の奈良の都の八重櫻、今日九里にはひぬるかなと、百人一首にも出てゐる通り、伊勢大輔といふお方の歌ぢや 似多「ハヽア、奈良といふ處は好い所ぢやナ 紛郎「何しろ元の都であるから、名物は此處で名高いのは奈良漬、菊屋の鰹酒、奈良晒布、奈良團扇、奈良足袋 似多「さう〳〵、屁でも音の好いのをおからといふ 紛郎「餘計な事を言ふなエ、これが興福寺、これが金堂、この向ふに在るのが北圓堂、此方のが南圓堂、これは西國九番の札所、御詠歌に、春の日は南圓堂に鄙きて、三笠の山にはるゝ薄雲、これから此處が三條通り、俳し最う日も暮れて來る依ッて、今夜此處で泊らう」と小刀屋に印判屋といふ二軒の宿屋がございます、この小刀屋善助に印判屋といふ旅籠屋は、三度の食器が變るといふ名代な旅亭でございます 似多「何方へ泊るエ 紛郎「

ヤア今宵は小刀屋善助方へ泊らうかエ ○「ヘエ貴郎方お泊りぢやアございませんか、私の方は印判屋でございます △「私の方は小刀屋でございます、お泊りぢやアございませんか」二人は小刀屋の宅へズッと這入ッて參りました 「ヘエお二人さんお泊り、コレ、お洗足水を持ッてお出でや、お早うさんでございます、其處で紛郎兵衛、似多八の兩人は、草鞋を解いてゐる、其處へさして山から這出といふ下女が洗足を持ッて參りましたが 下女「お客樣や、足を出さッせい、」おれがお前樣の脛を洗ッてやるだアー 似多「こりやア驚いたなア脛だッて言ヤアがる 下女「お客樣や、妾がお前樣の足を洗ッて居ると、國許の事を思出して、ホロ〳〵と涙が落れるだ 紛郎「オイ似多女泣かしたり何かして居るせ、イヤ似多八の色男 似多「冗談言うて臭れなエ、オイ女中、お前は何かエ乃公の足を洗うて涙

が落れるといふのは、國許に言交した情夫があつて、その情夫に添ふにも添はれず、止むを得ずこの奈良へ出て來て、小刀屋で奉公するのも世間の手前で斯う奉公してゐるのだらうが、私の足を洗うて涙が落れるといふのは、お前の色男の足に乃公の足が似て居るといふのかナ　下女「ナアコ、然うでねおれが故郷に居る時にやア、豐間ア畑で仕事をしてからに、宅へ歸ッて來ると、おれが牛の足をば洗ひをるのが役ぢやッた、お前の足を洗うて涙の落れるのは、おれが取扱うて居た牛の足によく似て居るからだ　似多「馬鹿言ふナ、爭の足と人間の足と間違ふ奴があるものか、紛さん、乃公を牛にしてけつかる　紛郎「冗談く言ふなエ　番頭「お客さん、お荷物は持ッて參ります、サア何卒奥へお通りを、最う直にお風呂も明きますし、御酒は直に持ッて參ります、併しお旅籠料のところは　紛郎「ナア似多八、如何しやう、嬶迚も乏しい伏ッて、マア並にして置かうかエ　似多「然うしやう〳〵　紛郎「オイ若衆、一番安いところです　番頭「イヤ心得ましてございます、併しお客さん、この頃は又道者が多うございますので、誠に何うもお氣の毒でございますが、座敷は一向ございませんゆゑ、皆さま御一緒に一ッ寢て戴きたうございます　紛郎「ア、何うでも大事ない、我慢をして居る」とてれから奥の座敷へさしてからに來て見ますると、イヤ女子も赤子も一所に居るやうな譯で、此方の方には チョッと二三人酒を飲み始めて居ります、歌を謠うたり三味線を彈いたりして喧々と言ッて居りまする、暫時いたしますると一人の男ですな、顔の色を變へて其處へ駈込んで參りました　○何ちや如何したんぢや　△「ア、喫驚いたしました　○「

何を喫驚しなすッた　△「今私やア雪隠へ這入りましたら、雪隠の中に大きな蜘蛛が居りました　○「蜘蛛、蜘蛛ぐらゐが貴郎怖いのですか　△「私やア生來いてより蜘蛛を見ますと、如何な小さい蜘蛛でも戰慄して身の毛が彌堅ちますので　○「ハヽア蜘蛛ぐらゐで、そりやア妙ぢやなア　◎「イヤそりやア何うとも言へませんせ　○「左樣かナ　◎「一体人には必らず何か怖いものがあるものです、といふのは、生れました時に、床の下へさして胞衣を埋めます、その胞衣の上をば初めて通ッた物が、最う一番怖いと言ひますナ　○「ハヽた、するとこのお方などは胞衣の上を蜘蛛が通ッたんですナ　◎「左樣　○「然う仰しやると私やア鼠が怖うございますので　◎「サア矢張り鼠が胞衣の上を通ッたんでせう　○「成程　◎「貴郎も何か怖いものがございませう　●「私ですか、ございますとも、私は鯛

が怖うございます　○「然うすると胞衣の上を鯛が通ッたんでせう　●「ヘエー　▲「私は又馬蜉蝣が怖うございます　◎「すると馬蜉蝣が胞衣の上を通ッたんですナ、貴郎は何ぞ怖いものはありませんか　◎「私だッて怖いものはあります、私は試に馬が怖いので　◎「それも初めて胞衣の上を馬が通ッたんで　●「空談なとを、床の下を馬が通れますものか　◎「マアその時胞衣を埋めてゐる折柄戸外を馬か通ッたッてなものでせうかエ、貴郎は　●「私は小犬が怖いので　◎「小犬、ハヽア、矢張り胞衣の上を通ッたんでせう、貴郎は　▲「私は雷が怖いので　◎「その時に矢張りその上で雷が鳴ッたッてなものですナ　●「私は又借金取が怖うございます　◎「矢張り借金取が胞衣の上を通ッたッてなものですナ　●「……　◎「空談言ひあさんナ　○「併しこの人間といふものは怖いものもありますが、好きなものもあるものですナ、貴郎が

も嫌ひなものがありや好きなものもありませう　○「ヘエ、私の好きなものといふのは二番に酒ですナ　◎「ヘエ、すると一番は　◎「然うです、一番は……一　○「何ですね　○「にらい官ひ聽うございますけれども、女と一緒に寢るッてな事が好きです　◎「そりやア誰れでも好きです、貴郎は何がお好きです　○「私やアこの興行物が好きです、芝居でも靜瑠璃でも似て落語でも、見いたり聞いたりする事が至ッて好きで　◎「成程、で、貴郎は　△「私やア釣が好きです　◎「ヘエー、貴郎は　○「善哉餅が好きでございます　◎「貴郎は　○「私やア苦い物が好きです　◎「何うも妙ですなア、苦い物が好き、矢張り出が好くのですナ、貴郎は何がお好きです　▲「私やアこの密消炭が好きでございます　◎「妙なものが好きでございますナ、貴

郎は　●「私やア又この雲木、あいつをシガ〳〵噛んで居ないので　◎「イヤ然ういふお方もあるものです、貴郎はナ　似多「私やア又壁土が好きです　◎「何が好きです　似多「イヱ壁土が　◎「アノ壁土、ヘエー、何ういふ壁土がお好きなんで　似多「ヱー如何なのでも壁土なら喫べたいので、それが私の病氣でございます　◎「ヘエー、妙なものを好きなお方があるものですナ、併し貴郎そんな事は出來やアしません　◎「大事でございます、貴郎が好きだと言ふから、私が引受けます、壁土を殿ッて遣げますから」と煙管を以て片傍の壁をばトン〳〵と殿ちました　◎「サアお上り　似多「有難う、こりやア旨い」　鼠子に乘ッて似多八は、壁土をば喫ひ始めました、側にゐた皆の者は、呆れて見て居りましたが、その夜はコッリと寢まして、翌朝頃

を喫べて紛郎兵衛、似多八の両人は、戸外へさして立出でゝしたが紛郎「これを西へ行くと西大寺、尼ケ辻、此方へ行くと暗峠の方へ出るのぢやが、南へ廻ッて行かう」とこれをば南へさして出て参りました紛郎「サアこれが木辻ぢや、往昔は此處をば鬼の辻と云うた、白寶年間に時の御門が行幸あらせれた時に、その當時といふものは此處は最う一面の森であッた、白雲でも盗賊が出る位ゐであッた、それで此處を鬼辻と云うたさうで、淋しい所であるから、何うかせよといふ勅諚が下ッた時に願出して此處へ遊女を設けて、それから木辻と書くやうになッた、此處で有名な女郎屋といふのは米濱に下の河内屋、上の河内屋といふのぢや、彼處に見にるのが彼れが死堂の芝居や、サアお出で」とこれから西へ取ッて参りました紛郎「これが大安寺堤、芝居でする進藤治郎左衛門が返撃に遭うたッて所は此處ぢや、これが大安寺餅といふ名物ぢやこれからが郡山ぢや似多「ハヽア、郡山で何ぞ見る所があるか」紛郎「これから左へ這入ッて行くと外川村、これが留の小川といふ似多「ハヽア、この川は何ぞ由緒のある所か紛郎「これはその老婆さんが往昔洗濯に行ッたッて所ぢや、老婆は山へ柴刈りに老婆は川へ洗濯にといふ昔話があるだらう似多「ハヽ、けれども水は流れて居りやアせぬがナ紛郎「サア往昔はこれでも矢張り流れて居たんぢや似多「ハヽア、このお宮さんは何ぢやエ紛郎「これは舌切雀さんの宮ぢや、彼處に見にるのは彼れは本多大内記様の御墓所だといふ似多「ハヽア、此處は何ぢやエ紛郎「これは生田傳八の墓ぢや似多「閻魔さん見たやうぢやなア紛郎「これは閻魔の像ぢやが、この下の蓋に書いてある生田傳八之墓と似多「成程、違ひない、彼んな悪い奴が何で此様な

所に墓があるのぢやらう　紛郎「これは芝居狂言にする宗禪寺馬場で治左衛門、喜八郎を反撃にしたといふ、さうしてこの大和へ出て來た、元郡山の家中であッた、　横町に餅屋がある、其處の宅に隠匿れて居たが、何うも人を殺し奔佐にも反撃にして置いて、身を潜めて居るといふのは、本意でないといふ、その餅屋の宅からこの墓を建てたといふやうに聞いて居る　似多「で、この觀音様見たやうなものがあるが、これは何ぢやェ　紛郎「それは傳八を育てた乳母の墓ぢや　似多「ふゝ　紛郎「サア此方へお出で……　源九郎さんといふ彼の森九郎稲荷さんぢや　似多「そんなら此處へ參詣をしやう」と御參詣をして、それから此方へやッて參りました　紛郎「これは岡町といふのぢやが、この郡山の花街、サアお出で……此處は片

桐といふ所ぢや　似多「此處に何ぞ名物があるかェ　紛郎「此所の名物といふのは生揚ぢやナ　似多「土産に買うて歸ならうか　紛郎「こんな物をヒヨコ〳〵　大阪へ提げても歸なれやアせぬが」　これから出て參りましたが　紛郎「サアこれが法隆寺、聖德太子様の御本山で、これは七堂伽藍といふ構造ぢや、大阪の四天王寺はこの伽藍を寫したものぢや、この糸櫻なぞは盛りの時分に來て見い、中々立派なものぢや、これは龍田川　似多「ハヽア　紛郎「これから秋にあるとこの両岸の紅葉がこうねふしたところは實に立派なものぢや、在原業平といふお方の歌に、千早振る神代も聞かず立田川、からくれなるに水くくるとは此處をいふたのは此處ぢや、これは龍田の明神、此處へさして鶏を進げると、雌鶏に鶏冠が出來て、皆雄鶏同様になるといふ　似多「ハヽア妙ぢやナ」　これを參詣しまして、プラ〳〵とやッて參り

ましたが紛郎「サア此處が岡豐橋」これから左へ行くと、道明寺の天神さんの方へ行くのですが、これからこの横を渡りまして、柏原、八尾から平野の大念佛をば横に見て、天王寺小路口へ戻ッて來ました、紛郎兵衛、似多八の兩人は、やう〳〵に宅へ歸りました、その後不圖似多八は右の肩へさして小さな疣のやうなものが出來ました、そいつを何ぢやいナと思ッて引千切ッて仕舞ふ、またその跡へニコッと出來る、心持が悪いから、途には寢床に就いて居りましたが、或日戸外から紛郎兵衛は「似多、在宅かエ似多「オウ紛さん紛郎「何ぢや、何處か悪いのか似多「ハ、紛郎「如何したのや似多「斯う肩へさして疣が出來たんだ、大きに心持が悪いので紛郎「ハ、ア疣が如何した似多「千切ると跡へさして出來、またそいつを千切ると跡へさして出來るのぢや紛郎「ハ、ウ、藥を服んで居てか似多「

別に何處も悪いといふ事はない、只氣味が悪い位ッて寢てるのぢやが、別に藥は服んで居やアせぬ紛郎「併し發生しないといけないせ」と紛郎兵衛は歸ッて仕舞ふ、肩の疣でございます、千切る度にチク〳〵と大きうなりますから、途には似多八は根負けをして打捨てゝ置きましたが、恁くて半年程經ちますと、この瘤は富前の人の顏はどになりまして、目鼻がヤンと出來ました、そのうちにソロ〳〵と言を發きかけました瘤「コリヤ似多八似多「エ、ーッ、お前さん何ぢやエ瘤「乃公ア西塔の傍に住んで居た武藏坊辨慶といふものぢや似多「ヘエー、して辨慶さんが何で私の肩へさして出店をなすッたのぢや辨慶「貴樣はこの春南都の小刀屋善助といふ宿屋へ泊ッた事があるだらう似多「遲ひない泊ッた事があります、それが如何したので辨慶「その時に貴樣は壁土を喫ッたんじやらう

似多「ヘエ、壁土を喫ひました、それが如何したんですね」弁慶「彼の壁の中へ、岩佐又兵衛といふ畫師が、乃公の姿をば心を籠めて描きをッた、それをば何日か彼の壁へ塗込めて仕舞ッた、何うかして今一ト度世に顯れ、源氏の御世に顯さんと思ふ折柄、貴様が壁土をば喫ッたに依ッて、汝の肩へさして乃公が顯れて出て、今日から貴様の身体を乃公が借りるから、サアこれから酒も飲むし飯も喫ふし、女郎買にも伴れて行け」弁慶「いや似多「冗談言ひなさんナ、弁慶の一番勝負と云ッて、弁慶と小ふものは女嫌ひじや、川柳にも言うてありませう、弁慶「町は馬鹿だナァ嘆ァ」弁慶「そんな事は往昔の弁慶じゃ、今新うやッて世に顯れるから、女郎買にも伴れて行かぬと乃公ァ暴れるぞ」似多「こりやァ難いたなァ」似多「人は肩の弁慶めが無理言うて困ります、飯でも喫はさぬといふと、己れの手でお

のれが喫はれぬやうになッて、引張ッて弁慶が喫ッて仕舞ひ日に三升四升の飯を喫ひ、酒といへば二升三升は飲まにやァ置かぬといふ、實にその日の酒計にも差支へるやうな事になッて困ッて居りますると、或日の事また紛郎兵衛は訪れた紛郎「オイ似多、如何じやエ、少とは工合が好いか」似多「イヤ困ッた事が出來た」紛郎「如何した」似多「マァ乃公の一ッこの肩ァ見て呉れ」紛郎「何じや、エ、ッ……」似多「ソレ、お前と奈良で小刀屋に泊ッたらう」紛郎「違ひない」似多「彼の時に乃公が調子に乗ッて壁土を喫ッたナ」紛郎「イヤそんな事があッた」似多「この壁土の中へさして岩佐又兵衛といふ仁が、心を籠めて弁慶を描いたが、その描いた弁慶が壁の中へ塗込まれてあッたのをそれを知らぬで乃公ァ喫ッたんだ、ところが弁慶は源氏の世に顯さんといふので、乃公の肩へさして出張をして、乃公の

身体ァ此間中から辨慶にぉッて居るのじやから、酒は二升三升も飲みをるし、飯やァ三升も四升も喰ひをるので、貧に困ッて居るのじやが、酒や肴をば當てがはんと、頭打付をさすので、乃公ァマァ頭ァ痛うて往生して居る、何うか工夫はあるまいかナ　紛郎「そりやァ飛んだ事が出來たなァ、それじやァ斯うしたら如何だ、それをば病だと云ッてお拜み申したら救に立たぬが、京都の寺町に鮪藥師といふのがある、彼れは澤からお上りなすッたお藥師さんで、澤藥師といふのであるが何時の程にやら彼れをば鮪藥師々々々々と云ふが、このお藥師樣へさして章魚を斷ッてお拜み申すと、如何な病でも取れるさうだ、あんと京都の方にお前の親類もあるし、それへさして行ッて、向ふから毎日日參をして斷ッたら如何じや　似多「成程、それは有難い、それじやァ乃公の叔父貴が京都の釜座

といふ所に在る依ッて、それへ乃公ァ行ッて來やう」とこれから似多八はチャンと支度をしまして、八軒屋へやッて來ました、大道を歩くにも靈間歩くと頭が二ッございますので、人が目を着けますから、夜分に被物をさせて、やう〳〵八軒屋から三十石に乘ッて伏見に上り京都の釜座の親類へさしてやッて參りました、此處にて似多八は厄介になッて、毎日々々鮪藥師へ御參詣を致しまする、頭にはチョイと手拭を載せて歩いて居りますと、此方は靈陶しいものですから、又しても手拭を取ッて仕舞ひますから　似多「貴郎然う自由にして貰ふと大きに困りますから、皆人が頭が二ッあると言ッて居りまして、伊豫の松山に顔二ッの子が出來たといふが、その松山からこの京都へでも來て居るのじやァないかと、何うか我慢して被ッて居て下さいまし、私が困りますから　紛郎「エ、ーッ、

捨置け〳〵、醜陶しいや」やう〳〵に寺町へ來まするとて、丁度夕景になりました、寺々の入相の鐘を撞出す、辯慶は血相して「辯慶「龍井、片岡、伊勢、駿河、主君の御供して一の谷へ急げ〳〵」似多「戯談言ひなさんナ」辯慶「今のは陣鐘ではないか」似多「何を云うてなさるね、彼れは貴郎お寺の入相の鐘ですがナ」辯慶「ア、然うか」これから鮓屋師へさして御參詣を致しまして寺町へ參まするとて、向ふの方から堂上方の御佛參の歸りと見えて「下に〳〵」下に居らう、下に〳〵」と此方へ乘物がやッて參りまする、侍士は大手を振ッて武士「下に居らう、無禮者めが」と答めまするとて、例の辯慶は「裏でも喰へ、乃公ァ武藏坊辯慶」だと威張ッて大手を振ッてやッて參りますから、最早御駕籠側近くになりますと、近從の衆は「素破狼藉者、ソレッ」といふので、何れも椅の股立を高く揭げ、背後と左右から手を捉りました、姿は似多八でございますけれども、何しろ辨慶といふ豪勇ですから、兩人の者をば引外してドンと投げる、背後から羽交締めに抱かへる奴をば、これも掴うてドンと投げる、右から來れば左へ投げ、左から來れば右へ投げる、前からかゝッて來る奴をば、腰帶を持ってからに上へドンと投られた奴は宙天の雲に行當りまして、下へ落ちて來る、二度目に投げられた奴は宙天で行逢になって「貴郎お上りですか」といふ歟ぎ、似多八はズン〳〵と進寄り、駕籠の棒鼻に手をかけました侍士「無禮者待て、何奴なれば狼藉を致す、仔細を語れ」辯慶「ム、、聞きたくば云ッて聞かせん、耳を掩ばヒッてよッく聽れ、吾れを誰れぞと思ふ、天津兒屋根命中關白道隆公の後裔にして、冊は二位大納言の奴、熊野參詣の折柄別當辨正と心を當はせ、

遂に夫婦の契約をなしゝが、我排姙娠となり、十七月經ッて男子出生、幼名を鬼若丸と命け、播州書寫山にて成長なし、誕生水別當の屋敷に古跡を遺し、頭髮を剃し、京都比叡山に登り、觀慶阿闍梨の弟子と成りしが、その當時武藏といへる荒法師あり、この者相果てし後、跡を繼ぎて武藏となり、父辨正の辨の字と觀慶阿闍梨の慶の字と、これを合はせて、五條藏坊辨慶と命けたり、山を降ッて大原の里に住みしが、五條の天神へ丑の時詣での折柄、五條の石橋にて牛若丸に出逢ひ名乘れば源家の御曹司、辨慶二十余年榮華の夢、あとなく悲めて京都を拂ひ、屋島、檀の浦の戰ひに、頼朝、義經不和となり、腰越により追返され、吾れは奥州衣川にて立往生、記伊大明神と祭籠まれるまで、主君の御供をなしたるこの辨慶汝等如きの下に居やうや、奇怪千萬、ナヽ、何が小癪な主君「黙

物止て侍士「ハヽーッ」御怒儘の引戸をガラッと開けられましたり、中より廊の上下に提刀主君「コリャ其方は亂心者と相見ねたり、予がこれにて手討に致すから左樣に心得よ」似多「アヽ、モシ暫らくお待ち下さいまし、決して私しは亂心者でも何でもございません、御覽なさる通り、この耳の癖があの樣なことを申しましたのでございます、併し暫間なれば、御乘物先をば無禮を致しましたのでございますから、御手討にしやうと仰しやるのも御有理でございますが、夜分の事でございますから、何卒お慈悲に御見遁し下されてお助けをば願ひます」主公「イヤ暫間なれば可いが、夜分のことゝやに依ッて了簡することは相成らぬ、似多「ヘエー、それは又何故でございます」主公「されば夜のこゝは見遁しにならぬのとや」及々御退屈でございました、エー滑稽大和巡礼は、先づこれで大尾と致し

遂に夫婦の契約をなしゐが、我毋姙娠となり、十七月經ッて男子出生、幼名を鬼若丸と命け、播州書寫山にて成長なし、誕生水別當の屋敷に古跡を遺し、頭髪を剃し、京都比叡山に登り、覇慶阿闍梨の弟子と成りしが、その當時武藏といへる荒法師あり、この者相果てし後、跡を繼ぎて武藏となり、父辨正の辨の字と覇慶阿闍梨の慶の字と、これを合はせて、藏坊辨慶と命けたり、山を降ッて大原の里に住みしが、五條の天神へ丑の時詣での折柄、五條の石橋にて牛若丸に出逢ひ名乘れば源家の御曹司、辨慶二十余年榮華の夢、あとなく愛めて京都を拂ひ、屋島、檀の浦の戰ひに、頼朝、義經不和となり、腰越により追返され、吾れは奥州衣川にて立往生、他伊大明神と祭籠まれるまで、主君の御供をなしたるこの辨慶汝等如きの下に居やうや、奇怪千萬、ナ、何が小癪な主君「黙

物止て侍士「ハ、ーッ」御憑靈の引戸をガラリと開けられして、中より廊の上下に提刀主君「コリャ其方は亂心者と相見ゐたり、予がこれにて手討に致すから左樣に心得よ」似多「ア、モシ暫らくお待ち下さいまし、決して私しは亂心者でもなどございません、御覽なさる通り、この肩の瘡があの樣なことを申しましたのでございます、併し當間なれば、御乘物先をば無禮を致しましたのでございますが、夜分の事でございまと仰しやるのも御有理でございますから、何卒お慈悲に御見遁し下されてお助けをば願ひます」主公「イヤ當間なれば可いが、夜分のことじやに依ッて了簡することは相成らぬ」似多「ヘエー、それは又何故でございます」主公「されば夜のこぶは見遁しにならぬのじや」長々御退屈でございました、ヱー滑稽大和巡遊は、先づこれで大尾と致し

彼の細郎兵衛、似多八の兩人がこれから播州巡廻をしやうといふ滑稽のお話は、何れ遠からず近日口演いたしますから、そのときは相變らず御贔負に御愛顧あらんことを今より願ひ奉ります。

滑稽

大和めぐり大尾

文藝雜誌　新百千鳥　毎月一回發兌

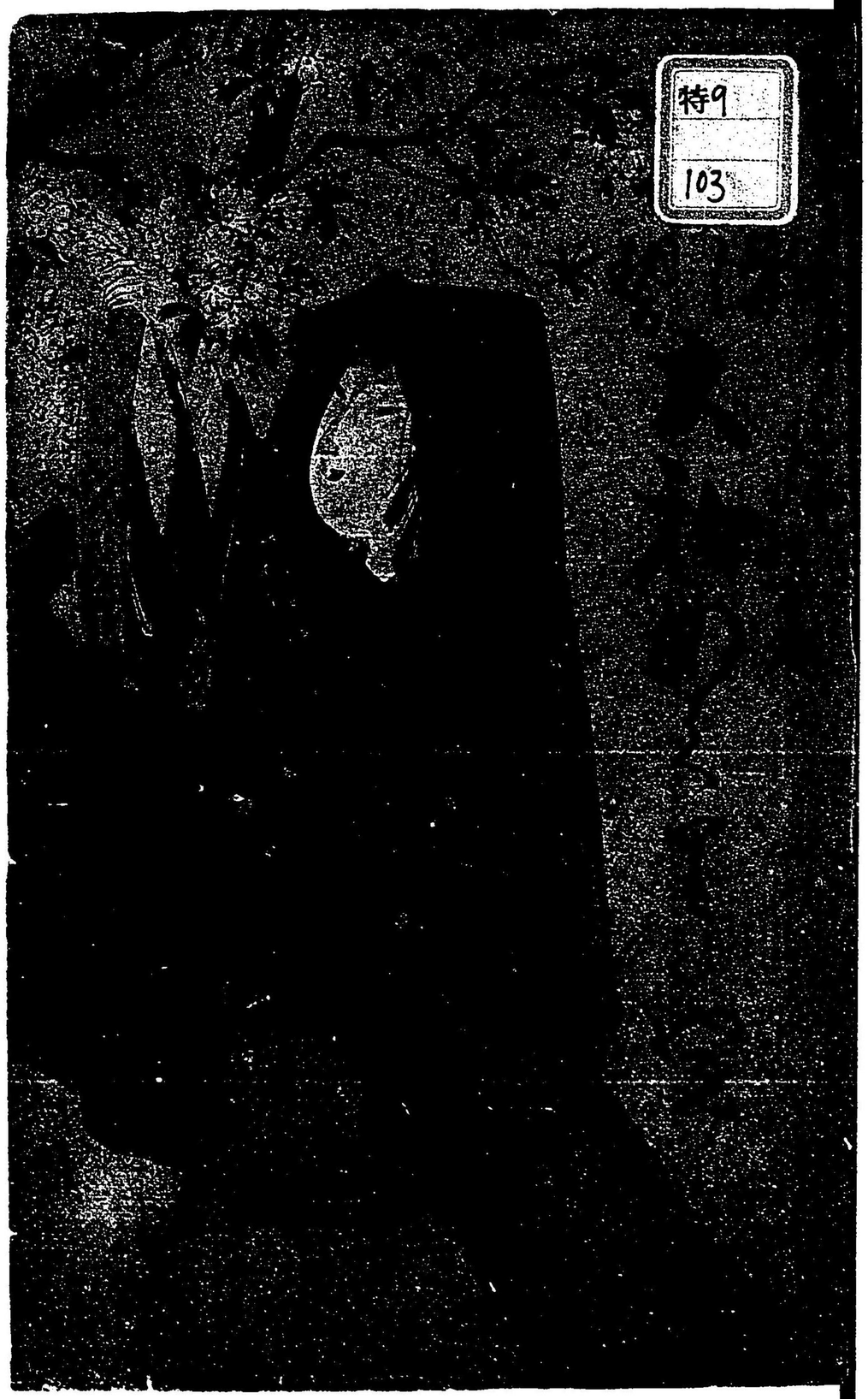
定價
壹冊（貳百三拾頁）金貳拾錢
六冊（半ケ年分）金壹圓拾四錢
十二冊（壹ケ年分）金貳圓廿八錢
郵稅（壹冊に付）金六

注意
本誌は前金ニアラザレバ一切送送セズ●前金切レ候節ハ直ニ送送ヲ止ム●郵便切手代用ハ一割增ノ事●代價領收書ハ金一圓未滿ハ茶番不申雜誌ノ到着ヲ以領收書ト承知アリタシ

明治三十一年四月二十日印刷發行

編輯者　大阪市北區曾根崎町六百九十九番地　丸山平次郎
發行兼印刷者　大阪市南區末吉橋通四丁目八十六番地　大澤治
印刷所　大阪市西區西道本町御堂筋角　井下活版合資會社
發行所　大阪市南區心齋橋北詰八十六番地　櫻井堂

版權所有



特9
103

097983−000−7

特9−103

滑稽大和めぐり

曽呂利　新左衛門／口演

M31
DBT−0176